

日本年金機構理事長賞 福島県 森 香菜子 様 (大学生)

数年前までの私は、年金が自分にとってはまだまだ遠い存在のように感じていました。

「若者の負担」、「将来、自分がもらえるかわからない」といった、いつかのニュースで聞いた声を鵜呑みにしながら、正直、深く考えることはありませんでした。

しかし、ちょうど2年前、私が20歳の誕生日を迎えたすぐ後に、年金との距離は突然縮まりました。自宅に「国民年金加入のお知らせ」が届いたからです。私は、この知らせを一読し、年金とは何なのか、どのような制度なのか、改めて学んだと同時に、大人としての初めての責任感を覚えました。そして、幼少の頃に亡くなった曾祖母のことを、ふと思い出しました。

私の記憶の中の曾祖母は、高齢者福祉施設に入居しており、しばしば母と一緒に曾祖母に会いに行くことがありました。施設の運動会の応援に行った際には、少し気恥ずかしそうにしながらも、どこか嬉しそうな表情をしていた曾祖母をおぼろげに覚えています。また、顔を出しに行くと、両手では持ちきれないほどのお菓子を、いつも持って帰らせてくれました。これは、曾祖母が亡くなって、かなり後になってから聞いた話ですが、曾祖母は施設の費用を自分の年金等から支払っていたそうです。

私は、曾祖母と同じ経験をしたことがないため、想像することしかできませんが、施設の中で自分らしく生活できたこと、新しく人との関わりを持たれたこと、家族の笑顔が見られたこと、きっと大きな喜びと感謝を感じていたのではないのでしょうか。また、その暮らしの中で、年金がどれだけ重要な役目を担っていたのかを、少しでも知ることができた気がします。

その一方で、年金を受給されている方と納付している方では、年金に対する認識に大きな違い、溝があるように感じました。少なくとも、私は年金についての正しい知識や良いイメージよりも先に、ネガティブなイメージを持っていました。しかし、本当の年金の役割や意義は違うということを知りました。年金は、誰一人取りこぼしはしない、そのためにあるのだと。ほんのちょっと想像力を働かせると、この制度があることによって、支えられている人、暮らしの中で喜びや、楽しみを手に入れている人を確かに感じることで

きるのです。

だからこそ私は、「若者にとっての負担」、「支払ったとしても、将来、自分には返ってこない」、このようなイメージを鵜呑みにしてしまっていたことを情けなく感じました。しかし、きっと私と同じようにネガティブなイメージを持っている人もるように思いません。では、私たった一人に、これから何ができるのだろう、と考えてみました。自分なりに考え出した答えは、年金を正しく知る姿勢・伝える姿勢を身につけること、です。それが、年金に対しての認識の違いの溝を埋めるための一歩だと考えました。私が、ネガティブなイメージを持ってしまったのは、年金について、納付する側の一方的な視点からしか捉えられていなかったことが大きな原因だと考えます。この制度があることで、確かに支えられている人がいることを知り、受給されている方の気持ちを少し想像することで、年金の見え方は大きく変化するのではないのでしょうか。また、「国民年金の加入のお知らせ」をこれから受け取る誰かのために、年金について正しく伝えていくことの必要性を感じました。正しい理解は、認識の違いの溝を埋め、繋がりをつくっていくのではないかと考えます。ゆえに、正しく伝えることは、国民年金に先に加入した者としての責任の一つでもあるように思うのです。これが、いまの私にできることだと考えました。

年金について考えるとき、人と人との繋がりを確かに感じることができるようになった今、この支え合いの輪の一員として社会に参加できていることをとても誇らしく思います。そして、この誰かのために想う温かい制度が、未来の社会でも正しく存在し続けることを願います。このエッセイを書き終えたとき私は、「国民年金加入のお知らせ」を受け取ったあの日と同じように、また一つ、大人としての責任感を覚えました。